



あすなるだより

2010年3月23日

発行 三重県立小児心療センター あすなる学園 広報担当
〒514 0818 三重県津市城山1 12 3 TEL.059 234 8700 FAX.059 234 9361
MAIL: asunaro@pref.mie.jp URL:http://www.pref.mie.jp/ASUNARO/HP/



合同講演会・シンポジウム報告



今回は、2009年7月23日、三重県総合文化センター 文化会館中ホールにおいて、あすなる学園、三重県自閉症・発達障害支援センター共催で行われました平成21年度合同講演会・シンポジウム『これからの地域子育て支援を考える～不登校・ひきこもりから透えてくるもの～』の講演会の要旨や感想をご紹介します。

講演会

「家族援助のツボ ～ホームとアウェイの面接～」



講師紹介

岡田隆介（おかだ りゅうすけ）

精神科医、広島市こども療育センター 心療部長。

プロフィール

1948年大阪生まれ、香川で育つ。

岡山大学医学部卒業 同神経精神医学教室入局。

広島市心身障害児福祉センター 附属診療所、広島県立女子大、同大学院講師勤務を経て、1998年より現在の広島市こども療育センター 心療部長、1980年より広島市知的障害者更生相談所長を兼務されている。

著書：家族の法則（単著）金剛出版

家族の法則（コミック版）集英社

家族療法のヒント（共著）金剛出版 他多数

1 社会性の乏しさと生活環境

幼児、児童、青年、成人と年齢層にわけて一貫して一つの問題、一つのテーマがある。

それは、社会性ということ。児童で言うと、いじめ、不登校の問題があるがクラスという集団になると息苦しいという社会性の未熟さがあるし、青年期には社会に出ていくことへのためらい、虐待の相談にしても社会性の乏しさを感じる。社会性というのは、集団（社会や家庭）の中で協調することで、一緒に何かを生きていくのがテーマ。では、そのことが苦手な人達がどうやって育っていったのか。

少子化、核家族化が社会性を学ぶ機会を奪っている、大家族であればそのことがある種集団であり、そこにルールがあり譲る譲らないの我慢の経験の場になる。豊さも、欲しいものがすぐ手に入る「待たなくていい」便利な社会を作ってきた。結果、「待たずに手にする喜び（便利さ）」が「待つで得る喜び（農業の収穫、子育て等）」を超えてしまう、すなわち「待たない」に慣れた「待てない」人達を世の中にたくさん作ってしまった。幼児期に済ませるべきテーマを済ませないでいってしまった。

2 社会性の発達

必要なことはテーマを見立てる、プラス手立てを考えるということ。

幼児期 ①「共有」することを体験しているかどうか。みんなで一緒に時間と物と場所を共有すること。一番最初の場所となるのが学校で、ストレスのかたまり。だが、ストレスは大事でストレスがない社会はあり得ない。孤独がおちて我慢があがる。不登校は「共有することが息苦しい、意味を感じない」からおこる。

②「貢献」の体験をしているかどうか。

「あなたがいるだけで喜び」「何もしなくても今のままで存在そのものが十分貢献している」ことをどう信じてもらうか。

貢献のないのが虐待、この時期に得られてない。

③割りこみのスキル

集団で学校で何がしんどいという話の輪の中に入るのが辛い。大人でもそう。その中に入っていけるかどうか、これは性格ではなく、スキルつまり技術があるかどうか。練習すればいいだけ。そのスキルをどう身につけるか。

児童期 ○ルールに折り合いをつける。学校はルール優先で妥協を学ぶべき場所。学校で折り合いをつけ、空気を読み距離を測る。

思春期 ○自分のいけてる所を見つける。自分を見てる人がいるというカードがあると、そのカードの前後まで光り出す。いけてるところを切り札に手持ちの札で生きる決意をする。ひきこもりの辛いのはこの機会がない。

青年期 ○自分の中で待つ、慣れるまで待つということができること。
自分の生きてる枠組みの中での話は何も広がっていかない。
想定問答に入っていない話に顔が上がる。
「今のままで役に立ってる」ことを信じたらその人は変わる。
枠の中で生きてきたのが広がりができ、楽になる。



3 ‘援助’のかたち

クライアントは仮説（絵）と枠組み（額縁）を持っている。この仮説を簡単にひっくりかえすことはできない。クライアントは苛酷な環境や不幸な出来事等を受け入れがたい他人、弱い自分と結んで絵を

書く。その絵を「自分という人間」と額縁にいれてやってくる。このクライアントがもってる絵・額縁をどう扱うか。絵自体は否定も共感もしない。その絵が正しいかどうかではなく、このように現実を縛る自分で決め付けた「枠」が問題であるということ。大事なものは、とらわれているこの「枠」を広げること。

○面接のポイント

ホームの面接 → 今の枠は一通りの見方でしかなく、新たな枠に置きかえる
(新しい方法を教える)

アウェイの面接 → アウェイすなわちクライアントの世界へ入っていき、
強み・マシ・違いを探す

クライアント 援助者

変わりたい	変えよう	想定内の一致	→ホームの面接
変わりたい	変えないでいい	「え？」意外な不一致	→アウェイの面接
変えたくない	変えよう	予想通りの不一致	→説得、指導の世界
変えたくない	変えないでいい	想定外的一致	→アウェイの面接

ほか、クライアントが問題とする事実を星座におきかえ、つなぎ方を変えれば同じ星座でも違う見方ができるというお話を素敵な映像とともにきかせていただき、大変エンターティナー性あふれる楽しい講演でした。

以下、参加された方からいくつかのご感想をいただきましたのでご紹介します。

鈴鹿市 教員 瀬井 より子さんの感想



待つことが人の成長にとってどれほど大切かを、今回の講演で改めて痛感しました。待つ必要のない便利な社会で、待たずに手に入る喜びに人は流されやすい、と岡田氏は話されました。そんな中、今も変わらぬ頑固さを貫くのが、学校という場所です。少子化で、譲り合う場面も我慢する必要もない中で育った子どもたちが、学校生活では何をすることも順番を待たなくてはならないし、また思い通りにいかない場面にもたびたび出会います。このようなギャップの中で、生きづらさを感じる子どもが増えるのは当たり前といえるかも知れません。そんな学校現場で過ごす私は以前から、学校だけが時代から取り残されているような気がして、「学校ってこれでいいんだろうか？」と不安になることさえありましたが、岡田氏の「学校はこの頑固さを持ち続けるべき」という話を聞き、少しほっとしました。ただ同時に、子どもたちを待たせるだけ待たせるものの、その後の楽しみを保障しない場面が多くなってはいないだろうかという疑問も残りました。

講演内容は、学校で深刻な問題となっている不登校やいじめを「ホーム&アウェイ」「額縁と絵」などにたとえ、重苦しいイメージでなかったことも印象深く、また ADHD の子どもの多動を「いたずら虫が動かしている」という表現もユニークで好感が持てました。ともすると、そういう子どもの全人格を否定しかねない学校現場に、私はこの考え方を伝えていきたいと思いました。

津市 保育士 鈴木 美保子 さんの感想



講演を聴いて特に印象に残ったのは、社会生活の乏しさと生活環境の変化についてです。社会においては「待たされない便利さ」が優先されていて、何でも待たずに手に入るため「待つて得る喜び」を経験する機会がほとんど得られません。一方、家庭においては少子化・核家族化が進み、兄弟姉妹関係の中で譲り合ったり教えあったり待たされたりという経験が少なくなってきました。待つということは大変ストレスのかかることで、それゆえに「待てない」ことがうまくいかないことの根源になっていると考えられます。したがって待ち時間を有効に使える子どもはうまくいくのだと思います。家庭でほとんどストレスのかからない生活をしている子どもたちにとって学校は大変ストレスのかかる環境であり、反対にストレスのかからない教育環境はありえないとも感じます。学校の中で子どもたちはストレスと上手につきあいながら、人との折り合いや自分自身との折り合いを付ける術を学んでいくわけですが、それが社会性を身につけるということなのだと思います。

後半の「ホーム&アウェイ」についてはやや理解しにくかったので、もう少し深くお話を聞きたいと思いました。

シンポジウムは、医療と教育というそれぞれの立場から「子どもへの支援」「家庭への支援」の方法が出されましたが、今後私は子どもや家庭を支援していく立場になると思うので具体的な支援方法の数々が大変参考になりました。

《お知らせ》

三重県立小児心療センターあすなろ学園に付置していました三重県自閉症・発達障害支援センターは平成22年3月31日をもって廃止することとなりました。

新規相談を希望される方は、次のところ（平成21年度自閉症・発達障害支援センター運営事業委託先）へお願いします。

あさけ学園 対象地域：県北部エリア
TEL 059-394-3412

れんげの里 対象地域：県南部エリア
TEL 0598-86-3911

外来診療のご案内

（平成22年4月1日現在）

*診察は完全予約制です。
都合により変更になる場合もあります。

●予約電話番号 **059-234-9700**

（予約時間 9:00~16:30）

曜日	月	火	水	木	金
1 診	中島	西田	大槻	小林	西田
2 診	持田	中西	石田	中西	大槻
3 診	小林	中島	中野	持田	中野